慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竟陵派の文学理論 : 公安派との差異点に重点をおいて
Sub Title	Literary theory of the Jing Ling(竟陵) School
Author	高, 仁徳(Ko, In-duck)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.52- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竟陵派の文学理論

――公安派との差異点に重点をおいて――

高 仁 徳

十五年周年紀念論文集所収)。最近になって中国で「竟陵派文学研究会」ができてからは(一九八四年)②、竟陵派の評 である(入矢義高氏 「公安から竟陵へ、―袁小修を中心として―」・「京都大学人文科学研究所紀要」第十四冊、 ての研究は、 おいて公安派との関係をどういうふうに解釈するかは、重要な研究テーマの一つだといえよう。ところが竟陵派につい な要素と異なる面を同時に持っているであろうということが自ずから想定される。したがって、竟陵派を研究するのに 安派の亜流として見做す劉大杰氏の説などである(『中国文学発展史』)。ここで公安派と竟陵派の間には、 を直すために起ったとする、 おもに明末の万暦年間に活動した竟陵派については、二つの異なる説がある。つまり、その前に活動した公安派の弊 公安派に比べればそれほどなされていない。公安派との関係についての研究も、 清初の銭謙益から始まって①以来中国文学史の中で 通説になっている説と、竟陵派を公 おもに公安派の立場から かなり同質的 創立二

選集

『詩帰』などが出版され、竟陵派についても活発な研究がなされている。そして竟陵派がいままで公安派に比べて

場から文学を論じた袁宏道に比べて、 派との差異点に重点をおきながら述べてみたい。またその差異点の中でも、比較的理解が混乱していると思われる両派 もあるが)。 低く評価されて来たのに反して、公安派の継承発展者として 新く位置づけられて行く傾向である (もちろん異なる見解 の を読むうちに考えたことをすこし述べたい。つまり、 「古」に対する態度、 筆者はこの問題について、 ここであえて結論を出そうとは思わない。 つまり復古観の差異点と、 そうとう鮮明な批評家意識も見せている鍾惺の批評家意識を、 両派が目指した詩境について述べたい。 竟陵派の文学理論及び創作態度について、 ただいままで公安派と竟陵派の文章 そして、 竟陵派の立場から公安 彼の おもに創作者の立 選」 につい

→ 擬古主義批判と「真詩」

研究成果を参考したこともことわっておきたい(ヨ)。袁宏道を対象にすることをことわっておきたい。ヰ

欠せない

重要な一面だと思われる。

ての認識を通じて考察してみたい。

鍾惺の批評家意識はいままであまり取り上げられなかったが、

竟陵派においてはおもにその代表的人物の鍾惺、

また小論を書くために、

作者の性霊、 の点に関して簡単に述べた 公安派と竟陵派の文学理論に すなわち個性が表われ おいての類似点は、 ていなければならないという点を主張したことにあると思われる。ここではまずこ おおむね後七子らの擬古主義を激しく非難した点と、文学作品には

こでの紹介は省略する。 公安派の文学理論の基礎が後七子らの擬古主義に反対する所に成り立っているのはいうまでもない事であるから、 後七子の巨頭王世貞が死んだのは李攀竜の死より二十年後の万暦十八年(一五九〇)であり、

そこ

53 —

前記の入矢義高氏の論文を初めとする既存の

公安派においてはその中心人物の

鍾惺を評価するのに

の は常に李 |鍾惺(一五七四~一六二五)はまだ十七歳であった。 ・王の擬古主義者らとその追従者に対する強い批判意識を伴っていた。 けれども擬古主義の余風はなお明末まで続き、 次に鍾惺の擬古主義者に対する態度を 鍾惺の文学活動

示している一節を引用してみる。

利其便於手口、遂以爲得古人之精神、 書、自是文人擧止、 何敢遂言仙佛! 且無古人矣。 然其理亦自深。 常憤嘉隆間名人、 自謂學古、 徒取古人極膚、 極狭、

憤慨したことは、 (『詩帰』は文人の本であり、どうしてあえて仙人、仏家の事まで言うだろうか! 極めて「套」のものを取り、書くのと言うのに楽なことをいい事にして、ついには古人の「精神」を得たと思 嘉靖隆慶年間の名人が自ら「学古」を言いながら、徒らに古人の極めて「膚」で、 しかしこの本の理は深い。

い、古人を無視する事である。)『隠秀軒集』・往集・「再報蔡敬夫」

嘉隆間の名人とは李攀竜・王世貞の後七子らである。『詩帰』を選定した理由を説明するのにあたって、 まず李・王

帰 傾けて評選した を得て「学古」を標榜する「妄者の言」を批判しているが、もちろん後七子らの事を指している。ここで鍾惺が心血 らが徒らに古人の 共選者の譚元春も「詩帰序」の中でこれと似た事を言う。すなわち、古人の「滯」・「熟」・「木」・「陋」なるもの 『古詩帰』・『唐詩帰』、 「膚」・「狭」・「套」なる者を取って古人の「精神」を得たとするのに憤激した事をあげている。 つまり『詩帰』を選定した大きい動機の一が擬古主義者に対する不満であるこ

したに違いない。 家置一編、 結果的に『詩帰』は、 奉之如尼丘之删定」と記録している程、 当時竟陵派を激しく批判した銭謙益も『列朝詩集小傳』・「鍾提学惺」条の中で 当時はやったのである。 したがって次の清初には擬古

わかる。また李攀竜には、李夢陽の「詩必盛唐」を忠実に反映した詩選集『古今詩删』があったのでそれも強く意識

とが

には 果した役割及び経過に関しては入矢義高氏の論文「詩帰について(東方学報京都第十六号昭和二十三年・京都大学)」 派打倒の第一の功労者として、 「世之論子日 鍾 譚 Щ 公安派よりも竟陵派の名があげられるようになり、 海内始知性靈二字」という記録も残っているくらいである。 『列朝詩集小傳』・「譚解元元春」 その当時に 条 が

ところで鍾惺が非難したのは後七子とその追従者らだけではない。 公安派末流の弊害に対しても、 しきりに 批

説を表わしている。次に一節を引用してみる。

詳細に論議されてい

公矣、是豈石公意哉? 石公惡世之群爲于鱗者、 今稱詩不排擊李于鱗、 使于鱗之精神光燄不復見于世、李氏功臣、 則人爭異之、猶之嘉隆間不歩趨于鱗者、人爭異之也。 孰有如石公者?今稱詩者、 ……勢有窮而必變、 遍滿世界、 物有孤 化而爲石 而

(いま詩を称するのに、李攀竜―于鱗

―を排撃しなければ、

人々は争って これをあやしむ。 これは嘉靖・隆慶年間

燄が世に表われないからである。李氏の功臣で、袁宏道のような人がいるだろうか? ば 遍満して袁宏道を模倣しているが、 に李攀竜を模倣しなければ あやしんだ事と 同じである。 「奇」を為す。袁宏道―石公―が世の人々の群がって李攀竜を模倣するのを悪んだのは、 これがどうして袁宏道が願うことであろうか?)『隠秀軒集』・長集・「問山亭 ……勢は極まれば必ず「変」を為し、 いま詩を称する者、 李攀竜の「精神」の光 物はひとりであ 世界に

ためであり、 「勢有窮而必變」の原理を見出したに違いない。 後七子らを追従する風潮が排撃する風潮に変った事に、 したがって袁宏道は李攀竜の功臣であると言う。つまり、 そして袁宏道が世の人々の李攀竜を模倣するのを 悪んだのは李攀竜 客観的で かつ批判的な 視線を向けている。 いま袁宏道を変えるのは、 袁宏道の功臣になる 鍾惺

を成すにつれて、 模倣することを悪んだのはいうまでもなく、 のである。 の文集の中にある(4)。 めている。 そして「奇」を為すのは 鍾惺の また鍾惺に従う人々が増え始めた。その事を初めて聞いて、 「変」に対しての認識がよく表われている。「奇」は「正」に対して「異」であり、「変」の意味も含 要するに、 鍾惺も袁宏道と同じく自分の門戸を立てようとした 意識はあまりなかったようであ 「孤」であると言う。「孤」、つまり「個」である事を願った袁宏道と鍾 人に模倣されることも好まなかったのは当然の事だといえよう。 鍾惺は驚いて反省したという記録が鍾 握が、 鍾 一惺が名 人を

る。

体系に欠けているきらいが 宏道の文学論に比べれば、 学作品を主張した。 れなりに彼が持っている文学像がつかまえられる。 獨抒性霊、 このように袁宏道と鍾惺の「個」を重視する態度と、 不拘格套」によく表現されているように、 この点においては鍾惺もほとんど変らない。 鍾惺の方は実際批評の必要に応じてすこしずつ発言した形であり、 ある。 けれども鍾惺の 『隠秀軒集』 といっても作品の内容を重視しており、 作者の個性が形式的なきまりにこだわりなく発露されている文 彼らの文学観とは深く関連している。袁宏道は、 の中に含まれている論・序・記・書牘などを読めば、 ただそうとう体系的でめいせきな論理を持っている衰 形式に関しての論議は見ら したがってやや断片的で あの有名な そ

次に鍾惺の詩観を表わす一節を引用してみる。

れ

ないが、この点は袁宏道も同じである。

欲有言者、 夫詩、 道性情者也、 聲譽之言也。 發而爲言、 不得已而有言、言其心之所不能不有者、 言其心之所不能不有、非謂其事之所不可無而必欲有言也。 性情之言也。 以爲事之所不可無而

必

(詩は性情を言うものである。発して言にするのに、 その心の中の有らざるを得ない所を 言うのであり、 その事の

中でなくすのができなくて必ず言おうとする所を言うのではない。 性情の言である。)『隠秀軒集』・ 長集・ 「陪郎草序」 必ず言おうとする所のものは声誉の言である。やむをえず言い、その心の中の有らざるを得ない所を言うのは おもうのには、 事の中でなくすのができなく

ものではないという意味になるだろう。 なるだろう。詩とは、心の働きによってやむをえず発する個性を表わすものであり、自分のよい評判を得るために言う でとらえられると思われる。「声誉」はよい評判の意味であるから、「声誉の言」とはよい評判を得るために言う言葉に ここで「性情」は、 その人だけが持っている本性、つまり個性の意味であり、 袁宏道においての 「性霊」と同じ意味

譚元春は次のように言う。

夫作詩者一情獨往、 胸中不可強 萬象俱開、 口忽然吟、 手忽然書、 即手口原聽我胸中之所流、 手口不能測、 卽胸中原聽我手 口

はもともと我が手と口が止る所に任せて、強制することはできない-口をもともと心から流れて来るものに任せて、手と口は測る事ができない――何をうたい、何を書くかを――。 (詩を作る人の感情がひとり動けば、万象がみな開き、 口はたちまちうたい、 手はたちまち書く。すなわち、手と いつ止るかを――。)

『譚友夏合集』・巻九・「汪子戊巳詩序」

くものであるという点を強調している。これは、まさに袁宏道の 一の譚元春の一節は、詩とはある時客観的対象、つまり境に触発され、作者の心から自のずからあふれて来る情を書

非徒自己胸臆流出、不肯下筆、 有時情與境會、 頃刻千言、如水東注、令人奪魂

東の方に流れるようで、人の魂を奪う。)『錦帆集』・「敍小修詩 (自分の心から流れて来るものではなければあえて筆を取らず、 ある時情と 境が会えばたちまち千言を為して水が

を選したのは、 と軌を同じくするものである。 古人の「真詩」を求めるためであると「詩帰序」の中で明らかにしている。 ところで鍾惺の詩論の中では「真詩」という概念がよく使われている。 またここで彼は 鍾惺は 『詩帰』

したがって古人の「真詩」を見れば、古人の「精神」と接する事になるのである。一方、「真」の概念は郭紹虞氏が 「精神所爲也」と定義している。 つまり、 「真詩」とは作者の 「精神」―「性霊」・「性情」―が発露されている詩である。

は 国文学批評史』の中で言うどおり、 「叙小修詩」(5) の中で当時の詩を批判して、 袁宏道の詩論においても「変」の概念とともに核心的な位置を占めている。 雷同のものが多くて後世に伝わることができないという。 そしてもし 袁宏道

伝わるものが

あるとしても、

それは民間の婦人と児童がうたう擘破玉、

打草竿の類の民謡であって、

その理由は

無

58

は、 らえられるのは、 聞」・「無識」 李贄からの強い影響が認められるのはいうまでもない。「真詩」 0) 「真人」が作った「真声」であるからであると言う。 袁宏道と鍾惺、 どちらにおいても同じである。 ただ鍾惺においては学問一般が 袁宏道のこのような の意が 「作者の自然の本性が発露された詩」 「真」に対しての認識 「真詩」を作るのに障 の でと 中

害としてうけとられているふしは見られない。 むしろ質の高い詩を作るために「読書養気」を積極的にすすめてい

この点は袁宏道と鍾惺の詩論において大きい差異点の一つだと思われる。 またこの点は袁宏道と鍾惺が理想とする詩境

ともか カン わりを持っているので、 後でもうすこしくわしくふれたいと思う。

□ 公安派批判と「学古」

鍾惺が袁宏道個人に対してある程度の尊敬心を持って認めていたことは鍾惺の文集を読んでみれば感じとられ 撰している。このような関係を参酌すれば、竟陵派が公安派から少なからず影響をうけた事はまちがいないと思われる。 し一方、公安派の文学観及び作品に対して常に距離をおいて、 また何よりも前で考察したように、擬古主義批判と、いわば「真詩」を主張した点で大いに通じるものがある。そして ろうか。 鍾惺が公安派を盲目的に追従する公安派の末流を批判したのはいうまでもないが、公安派に対する態度はどうだった 鍾惺の師、 雷思霈は公安派の門人であったし、 鍾惺も袁氏兄弟と交際があり、 冷静でかつ批判的な態度を取った事も読み取られる。 袁宏道の死後 『袁中郎全集』を る。 しか

する批判の中で一番初めのものである。 次は万暦二十九年(一六〇一)、鍾惺二十八歳、 まだ諸生の時に書いた文章で、 彼の文集にのせられている公安派に対

こでまず鍾惺の公安派に対しての態度を考察してみたい。

"明詩無眞初盛、 前古所無、 而不知已爲中晚人道破。 而有眞中晚、 眞朱元、。又曰……,近日尸祝濟南諸公、親盡且祧。 由其眼中見大曆前語多、長慶後語少、忘其偶合、 稍能自出語、 以爲獨創。 **輙詫奇險、**

與言詩、。

分を祖とみなして、 (*明の詩には真の初 ・を崇拝する風潮はすこし遠くなった。やや自らの詩を作る事ができて、そのたびに「奇」・「険」をほこり、自 前に古人もなく、すでに中・晩唐の人が言いつくしたことを知らない。その眼の中には、 ・盛唐はないが、 真の中・晩唐、 真の宋元はある、。また言う。、最近済南の諸公―― 李攀竜ら 大暦

言が少ないから、 しつかえない。)『隠秀軒集』・藏集・「明茂才私謚文穆魏長公太易墓志銘 唐 の代宗の年号=七六六~七七九 その一致することに気づかなくて独創だと思うのである。 ――の前の言が多く、長慶 唐の穆宗の年号=八二一~八二四 け れどもその人はともに詩を語 -の後 るにさ

が、 に対しての傍観的で批判的態度がうかがえる。 中晚唐、 ではな 明詩には真の初・盛唐はないというのは当時初・盛唐の詩を模倣した前後七子らを否定するものである。 真の宋元はあるというのは、 応認めている。 また李攀竜らを崇拝する風潮がすこし遠くなったと言うことから、 公安派らの作品をすでに古人の中にあるものと言いながらも、 鍾惺の公安派に対する批判は後になってもその内容がそれほど変らな 後七子を模倣する事 それなりに仮のも そして真の

常に不満である。 でまた考察する事にする。 求めるものである。 体は鍾惺において必ずしも否定的評価だとはいえない。 原因は公安派が古人の 上文の内容を要約すれば次のようになる。まず公安派の詩風を「奇」・「険」で評しているが、「奇」・「険」それ自 それは後の公安派に対する批判を見ればはっきりとわかる。 公安派の作品と同じ風格の作品がすでに古典の中にある事を強調して(望ましい もちろん注意すべき事は鍾惺は「変」 「精神」を学んでいないからだとする。最後に、 けれども ここでは 否定的評価に近いと思われる (「奇」・「険」 だけではほこるものに足りな むしろ「奇」 のための「変」 次は、 は 「変」とも通じるものであり、 ともに詩を論ずるに足りるとした人が誰を指 は高く評価していない。 鍾惺は公安派が古人を無視することに対して 「変」から遠い)、そ この点に関しては後 変し は 鍾 惺

60

すか

ははっきりしないが文章の内容からみて (この文章の内容と 似ている文章がまた二個所出るので次に引用する。)、

ここでは公安派と竟陵派の文学観には通じ合える余地があるの

を暗示しているといえよう。

公安派の袁氏兄弟で

ある事はまちがいないと思われる。

活動を通じてもっと深化されたといえよう。 所在を追求することを決心したと 「隠秀軒集自序」 ところで鍾惺は万暦三十八年、 百のうちの一つの詩さえも残していないという。つまり、鍾惺のその時までの古典に対する認識が、 三十七歳の時進士に合格した年にあらためて「平氣精心」をもって、 そして進士合格 (この年に袁宏道が死んだ。)を新しい創作活動 の中で明かにしている。 そして その時までの詩を ほとんど删 その間 の 出 『の文学 [発点に

が 判意識をもっと高めるようになったと思われる。その時点までの公安派との接触からいろいろと影響されたと思われる たとしても、だからといってその間たちまち公安派のい それがどれくらいのものなのかをいうのは難 しい。 わゆる反古的態度に同調したとは思われない。 ただ鍾惺がたとえ擬古主義に対して終始批判的態度を取 それ は前で引用 ってい

したといえよう。

それにしたがってその時までの擬古主義者及び公安派の「古」を無視する態度に対する漠然とした批

した諸生の時に書いた公安派に対する批判の文章の内容と、鍾惺の文学観が確立された後書かれた次の文章の内容が、

同じパタンであることからもうかがえる。

近

!時聰明者矯之曰。 "何古之法?

須自出眼光*。

不知其至處、

又不過玉川・玉蟾之唾

にすぎない。)『隠秀軒集・往集・『再報蔡敬夫』 く力を出さなければならない〟と。 (近来の聡明な人が出てこれ ——擬古主義者 けれどもそのすぐれている処がどこか知らない。また玉川・ ―を矯めていうのに……゛何の古の法で あるか? 玉蟾の言説 自ら真相 の余端 見

盧仝のことであり、 聡明な人とはもちろん公安派のことをいうが前 彼の詩は一般的に 「奇険怪僻」 の と評されている韓愈の詩と同じ風格のものとされている。 批判 より語調がもっと辛辣になってい 、る事が わ か る。 玉 Ш そして盧 は 中唐の

ることを現わしているといえよう。 は宋の道士、葛長庚の名であり、詩人としての彼の名はほとんど知られていない。やはり公安派の詩を低く評価してい 仝の詩は『詩帰』にはただ二首しかのせられていない。ここから鍾惺の公安派の作品に対する評価がうかがえる。 鍾惺は「詩帰序」の中でもまた類似した内容の事を書いている。 玉蟾

以爲異。要其異又皆同乎古人之險且僻者、不則其俚者也。則何以服學古者之心? 今非無學古者、 大要取古人之極膚極狹極熟便于口手者、以爲古人在是。使捷者矯之、必于古人之外自爲一人之詩

ぶ人の心をしたがわせるか?)『隠秀軒集』・ 昃集・ 「詩帰序」 の「険」であり、 ならず古人の外で 自らひとりの詩を作り、「異」のものだと思う。要するにその「異」のものとはまたみんな古人 極めて「熟」の、口と手につごうがよいのを取って古人がここにいると思う。さとい人にこれを矯めさせれば、か (いま「古」を学ぶ人がいないというわけはないが、 その要とする所は古人の極めて「膚」で、 かつ「僻」のものでなければすなわちその「俚」のものである。すなわちどうやって「古」を学 極めて

保っている事がわかる。 結局、 公安派に対する批判の内容が諸生の時期から文学観が確立された後である「詩帰序」を書く時期まで一貫性を このように鍾惺が常に公安派の「古」を無視する 態度を 批判しているのは、 鍾惺と公安派

「古」に対する態度にギャップがある事を示しているといえよう。

す「変」の概念について簡単に考察してみる事にする。公安派の「変」は、公安派文学論のもう一つの概念「真」と密 では公安派と竟陵派は 袁宏道は次のようにいう。 「古」に対してどういう態度を取っていたろうか。 ここではまず公安派の文学史観の根本を為

大抵物眞則貴、 真則我面不能同君面、 而況古人の面貌乎? 接な関係がある。

(おおよそ物は「真」であればだっとい、「真」であればすなわち我の面と君の面は同じになれない。まして古人の [にいたってはなおさらである。)『錦帆集』・「興丘長孺書」

「真」であれば自ずから異なる事になる。 したがって文学作品においても 「真」のものは時代によって変化するもの

また次のようにいう。

であるし、人によっても各々異なるものである。

もともとそれらによって優劣を論ずるのは不可である。)『錦帆集』・「敍小修詩」 (時勢には升降があるが、法は沿わなく、 唯夫代有升降、 而法不相沿、各極其變、各窮其趣、所以可貴。原不可以優劣論也。 おのおのその変化を極まり、 おのおのその趣を窮るから貴ぶべきである。

であり、逆に変化するものも貴ぶべきものになる。そして袁宏道はまた次のようにいう。 る事はできないという。ここで上で引用した二つの文の内容を合わせれば、「真」のものは貴ぶべきもので変化するもの つまり、 「法」は時代によって変化するものであり、その点こそが貴ぶ所以になり、 従って時代をもって優劣を論ず

哉 ? ず、魏の詩を作らず、六朝の詩を作らなかったその心を法る事が真に法る事である。)『瓶花齋集』・「敍竹林集」 人は森羅万象を師とし、 先輩を 師にしない。 唐を法る人はどうして 機格と字句をいうのか? (絵をよく書く人は、物を師とし、人を師としない。よく学ぶ人は、 心を師とし、 善畫者、師物不師人。善學者、師心不師道。 法其不爲漢、不爲魏、不爲六朝之心而已。是眞法者也。 善爲詩者、 師森羅萬象、 不師先輩。 道を師にしない。詩をよく作る 法李唐者、 唐の人が漢を作ら **豈謂其機格與字句**

ある(6)。 わらず「八股文」を詩・詞・曲と同じく位置づけ高く評価したのも、その時代性のためだという見解には同意するので また作者が真情を作品化したとしても、 それが必ずしも 言葉を媒介体とするいい表現を得て読者にうまく伝

る事になりやすいといえよう。袁宏道が「時文」、すなわち「八股文」の内容と形式においてのきびしい制約にもか

認識は前でもすでにふれたように、おもに後七子らに従う風潮が公安派に従う風潮に変わるのを目撃する事によって確 変」 に対する認識はどうだったろうか ? 鍾惺も詩文においての時勢の変化を認めていた。 論の弱点であり、鍾惺から「古を無視する」と批判された理由だと思われる。

わるとはいえない。まして「変」にこだわるとすればその作品の質が落るのは当然だといえよう。

認されたと思われる。それは次の一節からもうかがえる。

ょに追ったものがすなわち今はすたれ、今ひとりひびくものがすなわち後にはみんなの意見になる。) (およそ詩文は、 因襲有因襲之流弊、 因襲に従えば因襲による弊害がおこり、 矯枉有矯枉之流弊。 前之共趨、 それを矯めればそこからまた弊害が生じる。 即今之偏廢、 今之獨響、 即後之同聲

『隠秀軒集』・往集・「與王穉恭兄弟」

- 64

この点が袁宏道の詩

「因襲」はその当時においては後七子らであり、「矯枉」は公安派、 「獨響」 は鍾惺自身を指すといえよう。

鍾 惺はまた詩人の「変」を求める理想的態度について次のようにいう。 詩文年運不能不代趨而下。 精神者不能不同者也、 而作詩者之意興、 然其變無窮也。操其有窮者以求變、而欲以其異與氣運爭、 慮無不代求其高、 高者取異於途徑耳。夫途徑者、 吾以爲能爲異而終不 不能不異者也、

能爲高。其究途徑窮而異者與之俱窮、不亦愈勞而愈遠乎? 此不求古人眞詩之過也

径」において「異」を取るのみである。「途径」とは「異」ではないものがない、けれどもその「変」にはきわまり 至らない。途径を追究することがきわまれば、「異」もそれとともにきわまり、 苦労すればするほど 遠ざかるので がある。精神とは同じではないものがないが、その「変」はきわまりない。きわまりがあるものをもって「変」を (詩文の時勢はよよ追って下って行く。 その「異」をもって時勢と争おうとすれば、私おもうのに「異」を為す事ができても、ついに高いところに 詩を作る人の意興はおおむねよよその高いところを求め、高いところは 泛「途

すなわち「徐径」に分けて「変」を論ずる。 「惺はここにおいて、まず詩文の時勢はよよ下ることであるという。そして詩創作の「精神」と、 詩創作の「精神」は古今同じものである。けれどもその変化は無窮で、 それを表現する手

これは古人の真詩を求めないから生ずるあやまちである。)『隠秀軒集』・昃集・「詩帰序

精神」 って異ならざるをえないものであるが、 表われ ている 変化自体もすぐ行きづまってしまう。ここからみれば古今の「変」も認識せず古の 「真詩」 から得る感動は時代によって人によって異なる。一方、「途径」は時代によって人によ その変化にはきわまりがある。また「途径」だけの変化から生れた作品 は高

模倣する擬古主義者らはいうに足りるものではない。 だけをもって「変」 を求める事になりやすく、 また すでに述べたように 公安派の 作品もすでに古人の中にあるものにすぎないのである。 変」 を強調する文学観は、 「途径」だけを

だけに視点をおけば両派ともに「反古」になる。 る。 鍾惺は、 派は「反古」、古人の「真詩」から古人の「精神」を求める竟陵派はまた「復古」になるのである。 ともに の故に後の公安派と竟陵派に対する評判が分れるようになる。つまり、 と接触することであった。この差異点の故に鍾惺は公安派に対して常に批判的態度を取ったのである。 は結果的に袁宏道自身の心の動きに従う事を意味するが、鍾惺においては常に古人の ではなく詩に表われている古人の心、つまり「精神」であった。しかし古人の心を学ぶということは、 鍾 惺においても「学古」―古人の 古人の の復古主義者になる。しかし古人の心を学ぶ具体的な方法の差異点に視点をおけば、 「真詩」 の中で 「精神」 「真詩」を学ぶ事―の目的は変化を求めるためであり、 を見出して自らの また両派ともに古人の心を学ぶことを主張した点に視点をおけ 精神」 と接触させ、 両派ともに擬古主義に反対して変化を求めた点 新しい変化を求めようとするの 「真詩」 を読んで古人の 学ぶ対象も古詩の 自分の心に従う公安 袁宏道において またこの差異点 「精神_

(三) 「霊」・「厚」・「深幽孤峭

なおもむき」 11 を表現しているのならよしとする文学観を持っていたのでう)、 作品 では袁宏道と鍾惺が目指した詩境は何だったろうか。袁宏道はたとえ作品に「疵處」があっても、 袁宏道は は芸術作品だといえない になると思われる。だから「趣」の中には「清」・「遠」などいろいろの種類がありえるし句、「趣」が 「夫詩以趣爲主」(8) という。「趣」を定義すれば のである。 ここで注意すべき事は、 「性霊が発露されている作品なら自ずからでて来る自然 できあがった作品の 評価については 袁宏道は 「夫趣得之自然者深、 得之学問者浅」(10)と それが作者の個 多くを論じてい 性 な

٧١

い、「趣」を得るのに学問の役割を全面否定こそはしていないものの、

消極的にしか認めていないという点である。

れはすでに考察したように、当時において「無聞」、「無識」の「真人」が作った「真聲」だけが後世に伝わるとしたの と同じ発想だといってよかろう。

坡文選』の序文の中で、当時李卓吾のように心眼を持っている人までも含めておおぜいの人が、蘇東坡の文章の「本末」 を察せずに、漫然としてただ「趣」という一字で評価してしまうことを批判している。そして「趣」について次のよう 鍾惺は袁宏道が詩文において「趣」を強調したのとすこし異なる見解を持っている。鍾惺は自身が編した『東

に論じている。

足りるのである。 体を動かし生きる上に、聖賢になり豪傑になるのまでをみんな趣がするのではない。ゆえに「趣」とは生きる事で 「趣」が死ねば人も死ぬ。 人が物事を判別し、 体を動かして生きるのは「趣」があるからである。物事を判別し、 動以生而爲聖賢爲豪傑者、非盡趣所爲也。故趣者止於其足以生而已。今取其止于足以生者以盡東坡之文、可乎哉? (文において「趣」とは、「趣」がなければ文もないものである。 人に たとえれば「趣」の故に 人は生きるので、 いま生きる事で足りるに止まるものをもって東坡の文を尽すのが可能であろうか?)

『隠秀軒集』・昃集・「東坡文選序」

夫文之於趣、無之而無之者也。譬之人、趣其所以生也、趣死則死。人之能知覺運動以生者、趣所爲也。

に出入するからである。では鍾惺において理想的文章に近い東坡の文章はどういう風格をもって評価されればいいだろ つまり、 というのは、 鍾惺においてそれは「厚」だと思われる。袁宏道の強調する「趣」は鍾惺においては「霊」におき変えられる。 霊 は作品を作り出すのに欠かせない霊感に止まる。「厚」はその「霊」を根底にしてさらに「あつみ」を加 東坡の文は戦国の文の 「雄博高逸之氣」と 「紆回峭抜之情」 を保った上に、「仁義道徳禮樂刑政之中」

能知覺運

詩至於厚而無餘事矣。然從古未有無靈心而能爲詩者。厚出於靈、而靈者不卽能厚。

「霊」から出る。けれども「霊」がただちに「厚」になるのではない。)『隠秀軒集』・往集・「與高孩之觀察 〈詩は「厚」に至ればもう余事がない。 けれども古から「霊心」を 持ったなくて詩を 作った人はいない。「厚」 は

「厚」にはなれない。ではどうすれば「厚」に至ることができるだろうか。それに関して鍾惺は「必保此靈心、 詩は「厚」に至れば外に気にかける事はない。しかし「厚」は「霊」から出るけれども「霊」だからといってみんな 方可讀

書養氣以求其厚」という。 学問一般が疎外され、ひいては「真詩」を作るのに障害物とされたのに対して、 つまり、「霊心」を保った上に「讀書養氣」で「厚」を求めるのである。 鍾惺においては 袁宏道の討 「讀書」 が重要な 0) 中で

役割を果していることがわかる。それはまた次の一節からもうかがえる。

也。從學入者、心平而氣實、平之不復躁、實之不復浮、不得年而成者也。 (人が詩を作るのには入る所が異なり、成す所もまた異なる。「名」、「才」、「興」から入る人は、心があわただしく 人之爲詩、所入不同、 而其所成亦異。從名入、才入、 與入者、心躁而氣浮。 躁之就平、 浮之就實、 待年而成者

また浮ぶこともなく、年を待ったなくても詩を成す。)『隠秀軒集』・昃集・「孫曇生詩序」 から入るものは、心がしずかで気がみちていて、しずかなものがまたあわただしくなることはなく、みちたものが 気が浮んでいて、 あわただしいものがしずまり、浮んだものがみちるのには年を必要とし、その後詩を成す。「学」

学問が詩を作る入り口の一つとして認められている。その上、「名」、「才」、「興」から入る人が必ず年を取った後、

という工夫を通じてより高い次元の詩境、

つまり「厚」

を目指したといえよう。

竟陵派は

「讀書養氣」

ところで一般文学史と文学批評史の中で竟陵派の詩論及び作品は、 「深幽孤峭」 という言葉で特徴づけられ ってい る。

深幽 葉が象徴する詩境との二つの詩境を目指したといえよう。 が常に 意味でとらえられると思われる。 鍕 うふうに調和されていたかを言うのは難しい。 あたらない 惺 メージに近いと思われる。 する必要があるのを強調していることと①関係がふかいと思われる。 の 思別出手眼、 孤 実際の作風により近いということはいってよかろう。 「孤」・「独」 峭 が、 とは、 詩に関しての彼のいろいろな言説を総合してみれば彼が想定している詩境は、 另立 銭謙益の などの字をもって作者の個別性を強調し、 一深幽孤峭之宗、 ここで 『列朝詩集小傳』・「鍾提学惺」 そしてそこからは現実世界から 「深幽孤峭」 以驅駕古人之上。」という。 ただ「厚」は鍾惺が目指した理想的詩境であるとすれば、 を訳してみれば、「静かで奥深く、 一見異なるように見えるこの二つの詩境が 条から由 この意味で鍾惺という 人間により近い詩境は 詩を作るためにはわずらわしい俗事から離れて「索居自 の距離感及び孤立感が感じられる。 鍾惺の詩論の中で直接 来する。 結局鍾惺は「厚」と、 つまり、 かつひとりで超然としている。 銭謙益は鍾惺につい 「深幽孤 たしかに 、「深幽 此峭」 鍾 そしてこれは という言葉は見 惺の 孤 「深幽 「深幽孤 峭 「深幽孤 7 中でどうい 孤 という言 「擢第之 峭 鍾 は Ø 0 惺

だといえよう。

(四)

を見せたのはその作者らが袁宏道のもっとも好む作家だからである。 W たとは思われない。この点は袁宏道と鍾惺の創作態度にもかかわりがあり、彼らの文学活動を特徴づける重要点の一 ないが袁宏道が韓 え いが鍾惺ほどの情熱はもっていなかったらしい。 の文学 活 「選」して家に残した東坡の詩を得て、自分が増減したものであると述べている。 動の中で 柳・欧・蘇四大家文に批点を加えたという記録も見える(1)。 袁宏道に比べて目立つ点は 選 譚元春は 活動である。 「東坡詩選序」 鍾惺のように 袁宏道も の中で、 評選活動にまったく 「選」自体について使命感をもっ しかし 袁宏道が これらの本に関心 彼が 選」 またいま伝えられては した「東坡詩選」 無縁だったとは 7

いう観念を持っていたから、 品のできのよしあしにはあまりこだわらなかったといえよう。 つ だと思われる。 やはりおもに創作者の立場から詩を論じている点では変りがないが、 すなわち、 あらためて古人の作品の中で典範を求める必要性がなかったのである。 袁宏道はおもに創作者の立場であり、 そして古人の作品に対しても、 作品に作者の性霊さえ表われてい 古人の「真詩」を求める 変えるのが法ることだと それに比べると鍾 ればいいので、 「学古」を主張

70

学批評 の分野では あ のまり理 論の発展を見せていない中国文学史の中で、 選 は実際的に多大な影響を及ぼして来た。

自ら古人の「真詩」を「選」して当時の人々に見せる必要性があったのである。「選」という事は、

自分なりの鑑識眼を必要とする批評家の仕事である。

長い歴史にもかかわらず文

すでに完成された作品 る立場からみれば、

を対象にする、

それ は孔子が 選」 したとい われる 『詩経』 と昭明太子の 『文選』が、 中国文学史ではたした役割をみれ ばすぐ理解で

きるであろう。 だいたい明末という時期には 選」 が盛んに行われた。 その理由はいろいろとあげられる。 まず経済発

家が必要に応じて「選」を行いながらも、 はいうまでもない。 量 また印刷技術が発達して、 0 作 から来る「選」 ところが鍾惺の「選」 の必要性、 などがあげられると思われる。 「選」の重要性について明確な認識を見せていないのに比べて(彼らの文集 活動には、 当時の外の選家に比べて目立つ点がある。それは、 鍾惺の 「選」活動がこうした背景を後にしている事 当時の外 Ö 選

中で 行ったという点である。この点は彼が 「選」に対する言説が見られない)、 『詩帰』 鍾惺は の評選に傾けた情熱からもうかがえる。 「選」その自体を非常に重視して、 はっきりした認識を持って「選」を

つまり、

鍾惺は中国の古典

の文

71 —

人の中で珍しく「選」の批評的役割を認識していたといえよう。

人で自身の詩作品の 次に、「選」に対する認識を始めとする鍾惺が持っていた批評家意識について考察してみたい。 短所についてもよく気づいていた。 そして自身の作品に 「痕」 がある事を認める言説が彼の文集の 鍾惺は冷厳 な性 0

中に何回か出る。

夫所謂反覆於厚之一字者、 心知詩中實有此境也、 其下筆未能如此者、 則所謂知而未蹈、 期而 未至、 望而未之見

取った時この境界に至る事ができないのは、すなわち知っているが実行できなく、 (いわゆる「厚」の一字を反覆するのは、心では詩には実にこういう 境界があるのを知っているからである。 るが見えないという事である。)『隱秀軒集』・往集・「與高孩之觀察」 待っているが至らなく、 望んで

『詩帰』 が 「厚」を反覆しているといいながら鍾惺の詩文は 厚」 に達していないという友人の評に対し

う。 ての答えである。 鍾惺の批評家と創作者の間のギャップについての認識がよく表われている。 鍾惺はまた次のようにい

あるでしょう!) 『隠秀軒集』・ 昃集・ 「簡遠堂近詩序」 まことに詩を作る事はできないが知る事はできる人がいる。私が詩を評するのにも、 (千尺のにしきをよく作る人が必ずしもよくたつのではなく、 よくたつ人が必ずしもよく作るのではない。 夫錦繡千尺、善作者不必善裁、 善裁者、不必善作、 世固有不能詩而知詩者、 予所裁決、 あるいはまたあたるところが 或亦有以相 世に

ながらも 鍕 [惺は自分自身をたとえて、世には詩を作ることはできないが知ることはできる人がいるという。 創作の方より批評の方に自身をもっている事がうかがえる。 ではこういう批評家意識の発露から始まるとい 謙遜の言葉であり

する。 もよく表われている。 る選者の著書でもある。 が選者の好みにもっとかかわりがある。 価値を認められたものだからである。そして古典詩を対象にして「選」することは、作品の価値の高低にも関係がある 要とする事は変わら える べき典範である。それは古典作品は長い間伝わって来たからである。つまり、自然淘汰を耐えぬいて、 鍾惺のいう「選」の対象は大きく分ければ古人、当時の詩人、選者自身である。 「選」に対して鍾惺はどういう考えを持っていたのであろうか 結果的に、その選書は、古人の「精神」が表われている古人の著書でありながら、 ないが、 鍾惺のいう「学古」とは、このような「合述作爲一心、聯古今爲一人者」⑷のことを意味する。 鍾惺のこのような考えは、『詩帰』について「此雖選古人詩、實自著一書」(3) といったことに その対象によって「選」の意味がすこしずつ異なる。 つまり、多い古典の中で、選者の心目に合うものがあればそれを 鍾惺において古典作品は理想とする いずれの場合にも選者の批評眼を必 同時に選者の性情も含めてい 作品としてその 「選」して編

と今の読者の そして、古人の「精神」と選者の性情がともに含まれている選書を今の読者が 読むことによって、 また古人の 「精神」が接する。このように「古人の精神」を「後人の心目」に合わせる事が古典を「選」することの

目的であり、また選者の権力である(5)。

に に対して不満をもらしている記録がある(プ)。 ここからも鍾惺の であった(6)。 袁中道にも、 ることである。この場合には「選」することにもっと価値概念が入る。 次に近人の詩及び当時人の詩を「選」することは、 「厚」の境界の作品を選ばなければならない。 鍾惺が雷何思の詩を「選」するのにおいて「精」を求め、だった二冊しか残していない ところでこの場合、 おおむね無駄な作品を「删」して後世まで伝わる作品を「選」す 「選」に対する情熱がうかがえる。 世の中の選者としての鍾惺に対する評判は つまり、 性情が発露されている「真詩」、 さら

選而後作者上也、 作而自選者次也、 作而待人選者又次也

最後に、「選」の対象が選者自身である場合は、

創作態度と深く関係する。

鍾惺は次のようにいう。

である。) 『隠秀軒集』・餘集・「題魯文恪詩選後」 (選んだ後作るのがもっともいい、作った後自ら選ぶのはその次であり、 作 った後、 人が選ぶのを待つのはその次

には誰にも習作期が必要で、 に潜んでいる批評家の姿がうかがえる。そしてこういう慎重な創作態度はたしかに公安派においては見られない点であ 作態度の慎重性だと思われる。またこういう慎重な創作態度の強調からも、 つ ·まり、 作 :った後 されるよりは、 また傑作を生むためにはださくも必要であるのは当然だが、ここで鍾惺が言 作る前に作者が自ら選んで伝わるものを作るのが 作品のできにしんけいを使う、 一番望しいという。 創作者の た 創作者 のは

じる余裕を見せているといえよう。 鍾惺は袁宏道がおもに創作者の立場に止まったのに比べて、 そしてその原因は鍾惺のうまれつきの冷静な性格及び そこから一歩進み、 批評家の立場からも文学を論 「学古」 の主張による「選」

田 おわり

必要性であると思われる。

ので竟陵派を公安派の継承発展者にみるか、 もともと文人らの影響関係を正確にいうのは難しい。 別の文学流派にみるかの問題についてはあえて結論を出さない。 小論では竟陵派と公安派の文学作品は論議の対象にしてい ない

この点は鍾惺の冷静な性格及び彼が「学古」を主張したことと関係が深いと思われる。またこういうできあがった作品 明確な批評家意識を見せている。そしてその批評家意識はおもに「選」活動及び「選」に対する認識を通じて表われた。 主張したのである。 は両派の「古」に対する態度ともある程度かかわりをもっている。つまり鍾惺は「古人」の「真詩」を「読むこと」を 調するのに止まったが、 示している。 中・晩唐の風格と似ている事に対して、一貫して批判的態度を保っていた。それは両派の復古観にギャップがある事を 派の文学理論及びその創作態度を、 鍾惺は公安派との交際から多くを得たに 違いないと 思われるが、 小 論ではこの部分を少し明かにしたと思われる。 最後に、 鍾惺はもっと質の高い作品を目指し、その具体的方法として「讀書養氣」 袁宏道がおもに創作者の立場に止 公安派と比べて考察してみたら、 次に袁宏道は詩創作において性霊が発露された作 まったのに対して、 一方公安派の 以下のような結果が出た。 鍾惺はそこから一歩すすみ、 「古」に対する態度及びその作品が を主張した。 カゝ この点 -品を強 なりり

作態度においては、以上のようにかなり多くの差異点があることがわかった。そして時期的に後に来る竟陵派の方が、 の完成度に気を配る批評家意識の発露から、 鍾惺は慎重な創作態度を強調したのである。 結局、 両派の文学理論及び創

公安派の方をある程度補完している役割を担当しているといえよう。

注

- 1 『列朝詩集小傳』・丁集中・「袁稽勲宏道」

2

3

めぐって―」(『教養部紀要』十九号、一九七四年三月、東北大)。曹淑娟氏『晩明性霊小品研究』(文津出版社・一九八八年・ 東洋学』二十九号、一九七三年六月)。「詩評における逆説的表現のもつ意味について―"唐詩帰』の"静"、"深"、"幽』などを

入矢義高氏「真詩」(『吉川博士退休記念中国文学論集』)。阿部兼也氏「唐詩帰詩評用語試探― *説不出* と *深*―」(『集刊

研究論文集で『竟陵派与晩明文学革新思潮』がある(一九八七年・武漢大学出版社)。

- 4 『隠秀軒集』・長集・「潘穉恭詩序」
- 5 『錦帆集』
- 『中国文学批評史』(上海古籍出版社・復旦大学・一九八一年)
- 7 『錦帆集』・「敍小修詩」
- 8 『華嵩遊草』・「西京稿序」

9

『解脱集』・「敍陳正甫會心集」

- 10 『解脱集』・「敍陳正甫會心集」
- 11 『隠秀軒集』・昃集・「簡遠堂近詩序」
- 『隠秀軒集』・往集・「與蔡敬夫」 入矢義高氏「公安三著作表衷」(『支那学』十巻一号・一九四〇年十二月)

(1) 『隱秀軒集』· 昃集·「計歸序」 (1) 『隱秀軒集』· 昃集·「捺元歎詩叙」 (1) 『隱秀軒集』· 昃集·「詩歸序」

— 76 **—**